



下街道：明知ー内津ー多治見市前畑

日本武尊ゆかり

内々神社

東征の帰途、内津の坂を下るころ建稲種命の家来久米八腹が早馬で建稲種命が駿河の海で水死されたとの報告。これを聞いて尊は「現哉現哉(うつつかうつつかな)」と言って悲泣。霊を祀られたのが内々神社。

馬蹄石

内々神社に建稲種命の霊を祀ってこの地まで来た日本尊は振り返られた。その時馬の蹄の跡が岩盤についたと伝えられ、「馬蹄石」とか「駒返り」と云われる。駒の尾が西を向いたので「西尾」といわれ、地名として残る。



鵜飼家
江戸時代中ごろこの地に居住、幕末～大正まで薬を中心にみそ、たまりを販売。現在の建物元治元年(1864)5代目が建てたもの。

鵜飼家庵看板

内津草
けふここへたずね来むとはくらほねやくらげの骨にあふ心地する
也

安祥寺



安祥寺(曹洞宗 万松寺末)

往古は志賀村(名古屋北区)にあったものを享保5年(1755)現在地に移した境内には嘉永2年(1851)の御嶽講石碑。明治30年佐倉宗吾郎碑あり、道路近くには馬頭観音、三十三所観音はじめ多数の石仏がある。

明知町

内津、西尾、明知あたりは牛馬車による實稼ぎが盛んだったという。明知には牛馬宿(牛馬の一時預かり)が街道沿いに点在していたという。馬頭観音そのせいか多く見られる。

内津宿

勝川、坂下と同様の街村、街道に沿って上町、中町、下町と3町程の家並み、延宝4年(1676)戸数50戸。山稼ぎのほか副業に宿泊、人足賃稼ぎ、行商をしていた。大井、名古屋の間2日の行程での中間にあたる池田、坂下との間で馬継、宿泊で権利主張争いもあったという。商売では内津の名産のお茶をはじめ美濃や近村で集めた農産物、炭などを近隣の村名古屋、江戸へ送るなどしていたという。



高さ1.45mと大きい
馬頭観音
高さ45cm丸みのある自然石
"右廿原道 左江戸善光寺道"

奥の院蔵屋神社

内々神社より700m

内津峠

内々神社
すみれ塚
内津妙見寺
口すく石もあたりにきりぎりす也有
明治天皇御小休所跡碑
内津草
名もにたり鶯の細道
うつつ山 也有

内々神社(祭神建稲種命、日本武尊、宮簀媛命)

景行天皇41年に尾張の連祖建稲種命を祀ったのがはじまりと云う。中世までは篠木宗33ヵ村の総鎮守、毎年村毎に湯立神樂が奉納されていたという。尾張、美濃の農民は雨乞いを祈願していた。武將の崇敬も厚く、慶長2年(1597)秀吉が朝鮮出兵のとき戦勝祈願、社頭の大杉7本を伐採、帆柱とした。凱戦後お礼に社殿を造営したという。

社殿

本殿と拝殿の中間に幣殿をもつ"権現造り"、本殿は桁行三間、梁行二間、前に庇のある"三間社流造り"、拝殿は入母屋造り、一間の向拝。建築は信州の立川富棟、富之、富方親子が文化12年(1815)10年の歳月をかけて完成。

庭園

南北朝時代の名僧、夢窓国師(1275-1351)作庭回遊式林泉型の庭園。

池田町屋宿

下街道美濃国の南端の宿、内津峠の谷口集落として古くから栄え、商業、交通の中心であった。新撰美濃志によると「池田八郷の親村にて町屋といふ、下街道の宿場にて常に旅人往来す。街並み東西5町半ばかり」。

名医小池家跡

豊臣家に仕えていた小池玄芳が豊臣家滅亡後この地に移り住み、寛文3年(1666)開業。当時は木曾や犬山から通った患者もあった云う。

いろは屋



すみれ塚

内津の俳人長谷川三止が明和年(1769)芭蕉の句碑を也有の筆で建てる。
"山路きてなにやらゆかしすみれ塚"
芭蕉が逢坂山あたりで吟じたものだが内津がそこに似て居るとのことで建てる也有の句碑ほかある。

鹿啼くや山にうつふく人心



けんしょうじ

見性寺(曹洞宗 福巖寺末)

天文2年(1533)とか定かでない大須万松寺綱國和尚再建。安永2年(1733)横井也有が内津に滞在和尚と詩を唱和した記録残る。境内に和尚と也有の七言絶句や也有の句碑ほか仏像がある。

永泉寺(曹洞宗)

当初は真言宗明園寺、寛文8年(1668)改宗。境内に大イチョウの木。本尊聖観世音菩薩(重文)。

山庄(齊藤家)

町屋の地主、庄屋であった。永治時代は金融業を営む。

